

(様式1)

令和6年度 学校評価結果報告書(高等学校用)

(1) 学校教育目標	土に親しみ広く生物を愛し、社会の向上・発展に寄与しようとする資質と能力を養い、人間性豊かな心身ともにたくましい人間を育てる。 (1) 広く生命を尊重し、心豊かな人間の育成 (2) 勤労と責任を重んじ、社会に貢献できる人間の育成 (3) 心身ともに健康で、自主自立の精神に富んだ人間の育成	学校整理番号	32
(2) 現状と課題	・農業高校として、地域農業の特色を教育内容に反映させ、地域貢献活動を積極的に推進している。 ・生徒1人1人の個性を伸ばすために、奉仕活動や体験活動を通してコミュニケーション能力の育成を重視している。 ・基礎学力の定着と勤労観・職業観の育成に力を入れている。 ・学校行事や部活動の活性化に取り組んでいる。	自己評価実施日	令和 7 年 1 月 1 4 日 (火)
(3) 重点目標	1 「わかる授業」の実践や学習の基礎基本の定着など学習指導の充実を目指す。 2 基本的な生活習慣の確立や他人への思いやり育成など生徒指導の充実を目指す。 3 教育活動全般を通じて進路指導を推進し、職業観・勤労観を身につけさせ、進路の実現を目指す。 4 プロジェクト学習・農業クラブ活動等による専門教育の充実と問題解決能力や郷土愛の育成を目指す。	学校関係者評価実施日	令和 7 年 1 月 1 0 日 (金)
(4) 結果の公表	・ホームページ、学校評議員会、PTA集会等で公表する。	(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成 学校評議員5名 ①PTA会長 ②地域活性化事業推進者 ③地域商工会理事 ④地域農業有識者(県の農政) ⑤地域有識者(町の行政)	

自 己 評 価				学校関係者評価	(10) 次年度への課題と改善策
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	
1	○「わかる」授業の実践 ○学習の基礎基本の定着 ○外部講師活用による生徒の意識向上	①学び直し教科の見直し。 ②授業公開、研究授業の充実。 ③授業へのICT活用推進。 ④効果的な外部人材の活用。	学校設定科目「緑育心タイム」において中学校の学習内容の学び直しを行った。研究授業や授業参観をとおして授業改善を図った。ICT化により教職員の負担を軽減した。	B	校務支援システムは、操作に苦勞する場面が多く、情報処理委員会と連携してマニュアルを作成する必要がある。保護者のアンケート結果で、家庭との連携に関して評価が低い。今後改善に向けて取り組んでいく。
2	○基本的な生活習慣の確立 ○清掃及び整理整頓指導 ○生徒との触れあいによる生徒理解	①定期的な服装容儀指導の実施。 ②登校指導による生徒への声がけ ③生徒との面談実施。(5月・9月) ④生徒の実態把握と拡大対策会議の実施。	服装・容儀規程を見直し、制服の着こなしに柔軟性を持たせた。休み時間等の巡視を通して生徒の実態把握を重視した結果、今年度の事故・非行等の問題行動は0件であった。	B	問題行動がなく落ち着いて学校生活を送っている様子がわかる。来校者に対する挨拶はしっかりできているので、継続して指導して欲しい。
3	○正しい職業観の育成 ○早期進路目標決定の取組	①進路ガイダンスの工夫と充実。 ②職場体験の充実。 ③二者・三者面談の実施。 ④合格体験発表による意識の向上。	外部講師による進路ガイダンスを行い、実践的な進路情報を提供した。インターシップを通して進路意識の高揚を図った。掲示板や進路コーナーを活用し、進路状況に触れる機会を増やした。	B	企業は取得できる資格を見て求人を出すことがあるため、取得できる資格の周知を工夫した方がよい。入社後にもメリットもある。
4	○プロジェクト学習の推進 ○農業クラブ活動の推進 ○地域連携活動の推進 ○国際理解教育の充実	①充実した課題研究への取り組み。 ②外部機関との交流体験学習の推進。 ③地域連携活動の充実。 ④海外交流の実施。	全国レベルの各種コンクール・コンテストで大きな成果を上げた。農業クラブ活動は、県・東北・全国大会で優秀な成績を収めた。台湾の高校生が来校し、交流会を実施した。	A	生徒数確保が様々な解決に繋がっていく。農業と他の分野を繋げた学びが将来生かされるので、その強みを発信して欲しい。

(11) 総括	入学者数の減少により、農産物即売会は昨年度の2日開催から1日開催へと縮小せざるを得ない状況である。このように、本校において生徒募集が喫緊の課題であり、積極的に生徒募集を図るため、今年度は三八地区の中学校35校を訪問し、名久井農業高校のPRを行った。また、体験入学では両学科の体験ができるよう内容を改善し、アンケート内容も好評であった。全国募集活動においてはオープンスクール参加者は延べ8組、入学予定者は3名と昨年度よりも大幅に増えた。プロジェクト学習においては、ストックホルム青少年水大賞の国際大会出場を始め、各種コンクール・コンテスト等で入賞し、大きな成果を上げている。また、この活動が生徒の自己有用感の育成にも繋がっているため、今後もプロジェクト学習は力を入れて取り組んでいきたい。
---------	---